

「坊ちゃんのココがヒリヒリしないように、いっぱいペロペロしてやろうな」

泣きそうな声で喘ぎ悶えるディーノに自分自身も昂ぶってくるのを感じながら、今度は鈴口を中心に、円を描くように舌を這わせて先端の表面を唾液でコーティングし、まだあまりエラが張っていない雁首を舌先でつううとなぞっていく。

「んあああっ！ それ、何か…すご…ふあ、あ、はああ！」

「ほら、剥けてるほうがイイだろう？ 自分でスル時はただ扱っただけじゃなくて、ちゃんと剥いてから唾か先っぽから出るヌルヌルで指をよーく濡らしてこういうトコ弄ってやるともっと気持ちよくなれるぜ」

「う、うん…あふっ…はう…あああ…」

ディーノの口から漏れる声や吐息が甘美なものに変わっていく、シーツの上で暴れていた腰が快感を受け入れるかのように徐々に大人しくなっていく。

サオを握る掌から伝わってくる感触が、そろそろ絶頂が近いと告げていた。

「ココ…ココが特にイイんだ。ココをヌルヌルの指で弄ると堪らなくなっちゃう」

「ひああっ」

言いながら先端の裏筋にチロチロ舌を這わせる、ディーノの全身がピクンと震える。

そのまま絶頂へと導くように根元から先端に向

かって一気に舐め上げ、舌先と髭で裏筋を執拗に刺激した。

「やっ…ソコ、擦っちゃっ…ダ、ダメ、また変になるう…あひあ…何か、来…きやうっ！ くうッん!! ンァあああっ!!」

「うおっ!」

裏筋への愛撫に夢中になっていると、感極まった声と共に突如目の前に白い水柱が上がる。

限界に達したペニスにはロマーリオの眼前でびゅくびゅくと噴射を繰り返し、ディーノの腹や胸を白く汚していった。

「はあ、はあ…あふ…あああ…また…いっぱい…出ちゃ…た…」

新陳代謝が活発な年頃だからか、媚薬の効果なのか。

もう何度も達しているというのに少しも衰いを見せぬ量と勢いに、ロマーリオはしばし呆然としてしまった。

だが、精液まみれの腹を上下させ、少し苦しげに息を吐くディーノの姿にハッと我に返ると、慌ててティッシュを手にして心配そうにディーノの顔を覗き込む。

「坊ちゃん、大丈夫か?」

「うん…だいいよ…ぶ…」

「またやりすぎちゃったみてーだ。スマン」

「うん…こんなすごい、初めて…ロマって、エッチの時…何かすごいよお…」